



市民公開講座 木津川計先生

「上方芸能代表「粹の美意識はなぜ衰弱したのか」を、この間、4回開催されました。きもの文化塾では、鈴木一弘氏（「鈴木時代製研究所」誰ヶ袖屏風と竹屋町）、下村 輝氏（「日本竹箴技術保存研究会」会長「きもの装いが楽

2011年3月11日の大震災と大津波は歴史上例をみない甚大な被害をもたらしました。私も医師として震災直後の被災地に入らせていただきましたが、被災地の状況は言葉に絶するものでした。それから9ヶ月。被災された皆様の苦しみは終わることがありません。中でも原発被害が収束の兆しが見えないことに心が痛みます。しかし、少しずつではありますが復興に向かって進んでいることは誠に喜ばしく、2012年は復興

「きもの学」の発展と進歩のテーマのもとにきもの産業の振興に寄与する4題の研究成果が報告され、特別講演では、清田のり子理事（「日本のきものぶらす 編集発行人」）から「北越雪譜の世界を訪ねる」塩沢・小千谷伝統染織実地研修事前学習会」として産地の歴史も含めてのお話いただきました。

◆日本きもの学会も発足して6年目を数えます。きものまつわる文化的知見を多様に提示することを目的にしてみました。新年度からは、高橋裕子会長代行の下、運営体制も整い、様々な意欲的な事業展開が展望されます。ぜひ、ご期待ください。新年早々のビッグイベントでは、2月末に雪の越後路を尋ねます。ここでは、どこにもない寒さや雪の多さの「負の自然環境」を「資産」に変えて、珠玉の夏織物を織り続けてきました。それは、ちょうど、危機に向かう際の、わが国の「底力」に通じるものに違いありません。

## 知見を積み上げ、震災復興と きもの未来への跳躍を

日本きもの学会・会長代行 高橋裕子  
国立大学法人奈良女子大学 保健管理センター教授



の年となつてほしいと強く願わずにいられません。さて波多野進前会長先生のご退陣に伴い会長代行のご指名をいただいで5ヶ月が過ぎました。その間、多くのご支援ご指導を賜りましたことに感謝申し上げます。そして総会・市民公開講座・きもの文化塾・年次大会と、多くの皆様にご参加いただき盛り上げていただきましたことを衷心より感謝申し上げます。場々、専門家の方々の貴重なお話しを拝聴する機会を得ました。7月の総会では、市民公開講座として木津川計先生

「子どもと健康〜きもの健康学の幕開け」高橋裕子（奈良女子大学教授）  
「男のきものビジネスの確立に向けて」早坂伊織（オフィス早坂代表）  
特別講演／「第15回きもの文化塾」塩沢・小千谷産地研修の解説  
清田のり子（日本のきものぶらす 編集発行人）

### 第4回年次大会

#### 一般演題発表①

「子どもと健康〜きもの健康学に関する母親の意識について」安倍智子（奈良女子大学教授）

#### 一般演題発表②

「大学における浴衣実習プログラムとその心理学的評価について」東山明子（畿央大学教授）

#### 研究発表①

「きものと健康〜きもの健康学の幕開け」高橋裕子（奈良女子大学教授）

#### 研究発表②

「男のきものビジネスの確立に向けて」早坂伊織（オフィス早坂代表）

#### 特別講演

「北越雪譜の世界をたずねる」塩沢・小千谷産地研修の解説

#### 清田のり子

（日本のきものぶらす 編集発行人）

# 格式ばらずに、ひざ詰めの距離で染織の専門家と愛好家を結ぶ 富山弘基さん

京都伝統染織学芸舎主宰・当学会常任理事



平成21年4月から始まったきもの座学の「きもの文化塾」も回を重ねて15回。京都学園大学の京町屋キャンパス（京都市中京区新町蛸薬師下る）を会場に、年4〜5回を目途に開催されていますが、夜6時半から始まり8時過ぎごろまで続く夜学にも、主婦を初め毎回熱心な受講生の姿が見られます。この講座の人気の秘密は、なによりもユニークな講師陣とその内容（別表参照）にあります。講座テーマの立案から講師の交渉まで一人でこなしてこられたこの人の尽力があればこそ。今号はこの縁の下の力持ちに登場願いました。

●きもの文化塾を始められたきっかけは。

「京都はきもの街、そして染織の街で、それらに携われる方々も多い土地柄なのに、気軽に学べる場がありませんでした。わずかに『きもの学』がスタートしています。一方、受講に際しても遠慮なく、どんどん質問してほしいと言っています。講師の選定も、大先生ではなく、あくまで専門家、実務家の方に登壇願っています。もともと、薄謝しか用意できませんので、もっぱら講師の方の好意に甘えた運営となっておりますが、……」

●印象深かった講座などは：「幸いに、これまでの講座は概ね受講生から好評を得ていますが、私自身が目を開かされたという意味では、やはり善の伊藤廣明さんの話しは貴重でした。染織に関係する勉強や研究をしている身でありながら、私たちは肝心のきもの愛好家の声を詳しく聞くことが少なかった。とりわけ、最前線できもの顧客と接しておられる方から、きもの愛のこころを仕入れや商品の製作に生かす店側の苦心など、いわば、インサイダーの情報が聞けて、実に示唆に富む内容でした」

### きもの文化塾

回数	開講日	講師（敬称略）	テーマ
1	4月23日（木）	日本家紋研究会理事 森本景一	家紋
2	5月28日（木）	帝塚山女子大学現代生活学部教授 榎村和代	卑呼の布
3	6月25日（木）	奈良女子大学保険管理センター教授 高橋裕子	きもの健康学
4	7月30日（木）	加賀友禪「由水十久」語り部 能登一彦	加賀友禪の美学
5	10月29日（木）	京都伝統染織学芸舎主宰 富山弘基	沖縄の伝統染織の歴史と文化
6	11月26日（木）	京都伝統染織学芸舎主宰 富山弘基	琉球列島染織紀行

回数	開講日	講師（敬称略）	テーマ
7	6月17日（火）	時代染織衣裳研究家 卯川治男	染織品！貴方ならこれをどうご覧になりますか
8	7月13日（火）	西陣織工業組合監事・総代 村山洋介	思い出クラフト～思い出の布いまインテリアに～
9	10月26日（火）	加賀友禪「由水十久」語り部 能登一彦	「加賀友禪染織実地研修」に向けて
10	2月22日（火）	株式会社タリ善 取締役 商品部長 伊藤廣明	呉服屋の独言（ひとりごと）
11	3月22日（火）	吉田手織工房主宰 吉田龍三	優れた手織物の条件と識別の方法について

回数	開講日	講師（敬称略）	テーマ
12	5月23日（月）	鈴木時代製研究所 鈴木一弘	誰ヶ袖屏風と竹屋町
13	10月25日（火）	絹のより 下村ねん代表 下村 輝	きもの装いが楽しくなる 絹と絹糸についての話
14	11月22日（火）	京友禪手描染作家 玉村 咏（アトリ工芸学）	京染めきものその彩り～いたずらに古風に染れず、むやみに新しからず～
15	12月10日（土）	日本のきものぶらす 編集・発行人 清田のり子	北越雪譜の世界をたずねる～塩沢・小千谷産地研修の解説～

「それに、この文化塾の講義をきっかけに、きもの産地の研修ツアーが実施されたことも印象深いですね。沖縄、金沢と2年連続で実施し、そして今年2月に

越後路へと足を伸ばしますが、産地へ出向いての研修旅行は、まさに、百聞は一見にしかず。地方に根付いた染織文化を実感する上で有意義なことです」

●今年の取り組みを聞かせてください。「これまで『きもの文化塾』は会場の都合もあって、夜に開講してきましたが、主婦の方には忙しい時間帯を潰すわけで、出かけにくいのではないのか、と気がかりでした。計に出にくいのは……。それで、昼間の開講の是非をアンケートで聞いたのです

が、9割の方が昼間開催を望んでおられました。前回は試しに昼間に開講しましたが、参加者が多かった。それで、今年からは開講を夜から昼に移行しようと思います。講義の内容では、幸いに染織の世界は広くて深いのでテーマに困るようなことはありません。講師の方も、まだまだ、在野に異色の方がおられますので、どんどん登壇願って、面白い講座をお届けできると考えています。これからも、肩肘張らずに、気楽でためになる講座運営を心がけていきますのでご期待ください」

## 3年、15回を数える隠れた人気の座学「きもの文化塾」

# 「雪ありて縮みあり」越後染織研修旅行に向けて

## 鈴木牧之「北越雪譜」の世界への誘い

清田 のり子

当会では、会員の皆様からの「ご要望」にお応えして、全国の染織産地を訪ねる研修旅行を実施してきました。第一回は、二泊三日の沖繩研修旅行、次いで昨年には一泊二日で加賀友禅の工房を訪ねました。いずれも、参加者から好評を受けていますが、今年は、「雪の越後路」へと足を伸ばします。冬真っ只中の二月下旬を予定していますが、産地は名に聞こえた豪雪地帯。冬の寒さを越して織りあがる夏織物の真髄を体感してもらおうと、あえてこの時期を選びました。

そして、研修旅行をナビゲートしてくださるのは、当会常任理事できもの雑誌（日本のきものぷらす）編集発行人の清田のり子さん。これまで、数え切れないほどこの産地に足を踏み入れられた実績に基づく人脈と豊富な情報を生かして、通常の産地見学では味わうことのない、魅力的な染織産地の実態に触れられることでしょう。

ここでは、第4回年次大会特別講演／（第15回きもの文化塾）を再録いたしました。



雪晒し



越後上布

りした衣料となるのである。牧之は「雪ありて縮あり。」魚沼郡の雪は縮の親といふべし」という名文句を残した。絵の素養もある鈴木牧之は、

雪国の人たちの営みをさまざまに描いていく。残念ながら牧之の死により、春から夏へ移るところで二編は終わっている。牧之が最初に本書の出版を期してから、発売に至るまでには、実に30年の歳月が費やされている。当時の出版事情は、地方にあっては不可能に近く、そのため、在江戸の文人などの仲介を試みる。牧之は、交流のあった山東京伝や滝沢馬琴の仲介を頼ったが、いずれも不調で、曲折の末、大坂での出版を目論むに至るが、これも、成功せず、話しは振り出しの江戸の戻り、京伝の弟・山東京山の協力で日の目をみることとなった。この間実に30年。出版されると、たちまち、700部を超える当時のベストセラーとなり、読者・書店の要望を受けて第二編が出版された。

小千谷縮の取材に初めて越後を訪れたのは昭和四十四年二月、真冬でも主な道は除雪されていたが、両側は二メートルの雪壁であった。それから三月、四月と行くたびにトンネルを抜けるとそこに現れる景色は変わり、春が広がっていった。

雪国と都会を繋ぐ上越新幹線が開通し、不便であった十日町にも日本海側から十日町を通って六日町に抜けるほくほく線が開通した。地球温暖化のためか、以前のような深い雪にも遭わなくなった。

小千谷は克雪都市宣言をしている。丈余の雪にもくじけない人たちは、今もそこで夏向きのひんやりとした肌触り

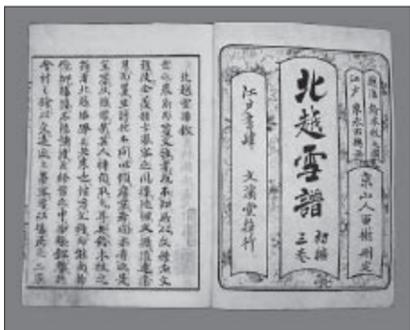
「国境の長いトンネルを抜けると雪国」とはまことに適切な表現である。冬、上越線の越後湯沢から長岡に至る沿線はまさに白一色、ほんの数十年前までは十一月から四月頃まで雪に閉ざされていた。鉄道で言えば越後湯沢から四つ目の塩沢に、江戸後期、鈴木牧之という縮問屋の主人がいた。彼は父の代から江戸の文人や絵描きたちとも親しい文化人であった。江戸では初雪が降るとまことに賑やか。大川に船を浮かべて雪見の盃を傾けるし、吉原では居続けの客が増えるから喜ぶ。二寸も積もれば大喜びである。江戸の人たちにとって雪は幻想的な美しい世界をつくる自然現象であった。

一年の半分を雪に閉ざされるわが越後の国とは何と違うことか……そこには越後を知らない人には想像もつかない生活がある。牧之は愛する越後の雪中での生活を江戸の人たちに知ってもらいたい、と、三十年もかかってさまざまな角度から雪中の世界を描き、幕末、江戸の版元から出版した。「北越雪譜」である。山里に雪の気配がすると、それぞれの里で人々は半年を過ごす態勢を整える。雪はどのように降り始めるか？どんな形をしているか？吹雪は？雪崩は？朝起きてみると一晩に六尺も積もっていることもある。雪の中で熊に助けられた人の話もある。女たちは窓に積む雪明りの中で春を待ちながら、苧麻から苧を績み、糸を作る。麻糸は乾くと切れやすいが、雪の湿り気が助けてくれる。糸を整え、機を織り、織り上がった布を雪の中で濯ぎ、雪の上で晒す。雪に閉ざされた集落

ごとに特長ある色柄の織物が出来上がっていく。雪解けの頃になると、信濃川畔の小千谷の町には、江戸や京・大坂の人たちが集まってきた縮市が立つ。雪中で織り上げた麻布が集まり、値踏みされ、取引される。雪国では嫁入りの条件は容貌より機織りの腕の上手下手で決まる。上質の布は高く買い取られて家を潤すからである。上布は降積んだ雪の中で織り上げられ、暑い夏にひんやり



## 出版まで苦節 30 年、雪国・越後のすべてを詰め込む



本書は1837年（天保8）に初編各巻が江戸で発行され、1841年（天保12）に二編4巻が発売された。初編巻之上はまず、雪の成因・雪の結晶のスケッチなど科学的分析から筆を起し、雪中洪水や熊が雪中に人を助けた逸話など、「暖国」の人々の興味を誘う内容が多い。巻之中は、牧之自身が縮の仲買商人であったことから、越後魚沼の名産品であった縮（ちぢみ）に関する話だが、その素材や機織り方法、縮のさらし、縮の流通などに亘って詳述されている。巻之下は、洩海川の珍蝶や鮭に関する考察、越後に伝わる様々な奇譚、山岳地方の方言、など博物学的な内容となっている。

二編巻一は、越後各地の案内に始まり、雪国の一年を、多様な逸話・記録・考察によって正月から順に描いていく。残念ながら牧之の死により、春から夏へ移るところで二編は終わっている。牧之が最初に本書の出版を期してから、発売に至るまでには、実に30年の歳月が費やされている。当時の出版事情は、地方にあっては不可能に近く、そのため、在江戸の文人などの仲介を試みる。牧之は、交流のあった山東京伝や滝沢馬琴の仲介を頼ったが、いずれも不調で、曲折の末、大坂での出版を目論むに至るが、これも、成功せず、話しは振り出しの江戸の戻り、京伝の弟・山東京山の協力で日の目をみることとなった。この間実に30年。出版されると、たちまち、700部を超える当時のベストセラーとなり、読者・書店の要望を受けて第二編が出版された。

出版に導いたのは、なんといっても、牧之の執念だった。全編を通して、「暖国」ではまったく想像もつかない雪国の生活が、珍しい風習・逸話とともに数多く載せられているが、本書のテーマは、雪国の奇習・奇譚を紹介するにとどまるものではなく、雪との厳しい闘いに耐えながら生活する郷土の生活ぶりを暖国の人々へ知らせたい、という点に求められる。本書に数多く掲載されている挿絵も、牧之が原画を描いたもので、単なる戯作にとどまるものではなく、現代にあっては、雪国越後の貴重な民俗・方言・地理・産業史料と位置づけられる。

の薄物を作ってくれている。小千谷縮・越後上布を作る技術は、昭和三十年、国の重要無形文化財に指定されているが、平成二十一年にはユネスコの世界文化遺産としても認定された。越後上布を作る技術は雪国という自然環境とそこに住まう人による合作だからである。来る二月末、学会の第三回研修旅行は越後の織物を訪ねることに決まった。雪の中で作られている織物を見るためである。さて、この冬の雪はどれ程積もるであろう？